繪本太閤記

四編 七

特
へ伊13
1833
79

繪本太閤記七篇巻之七

目録

明智左馬介生害話
明智左馬介宝器を秀吉卿に呈る圖
坂本落城之圖
妻木主計頭難風に逢圖
荒木山城守剃髪の圖
斎藤内蔵介馬を奪ふて堅田に馳る圖
斎藤内蔵介堅田の浦に乳母の家に弔ふ圖

特へ13
號 1833
卷 43

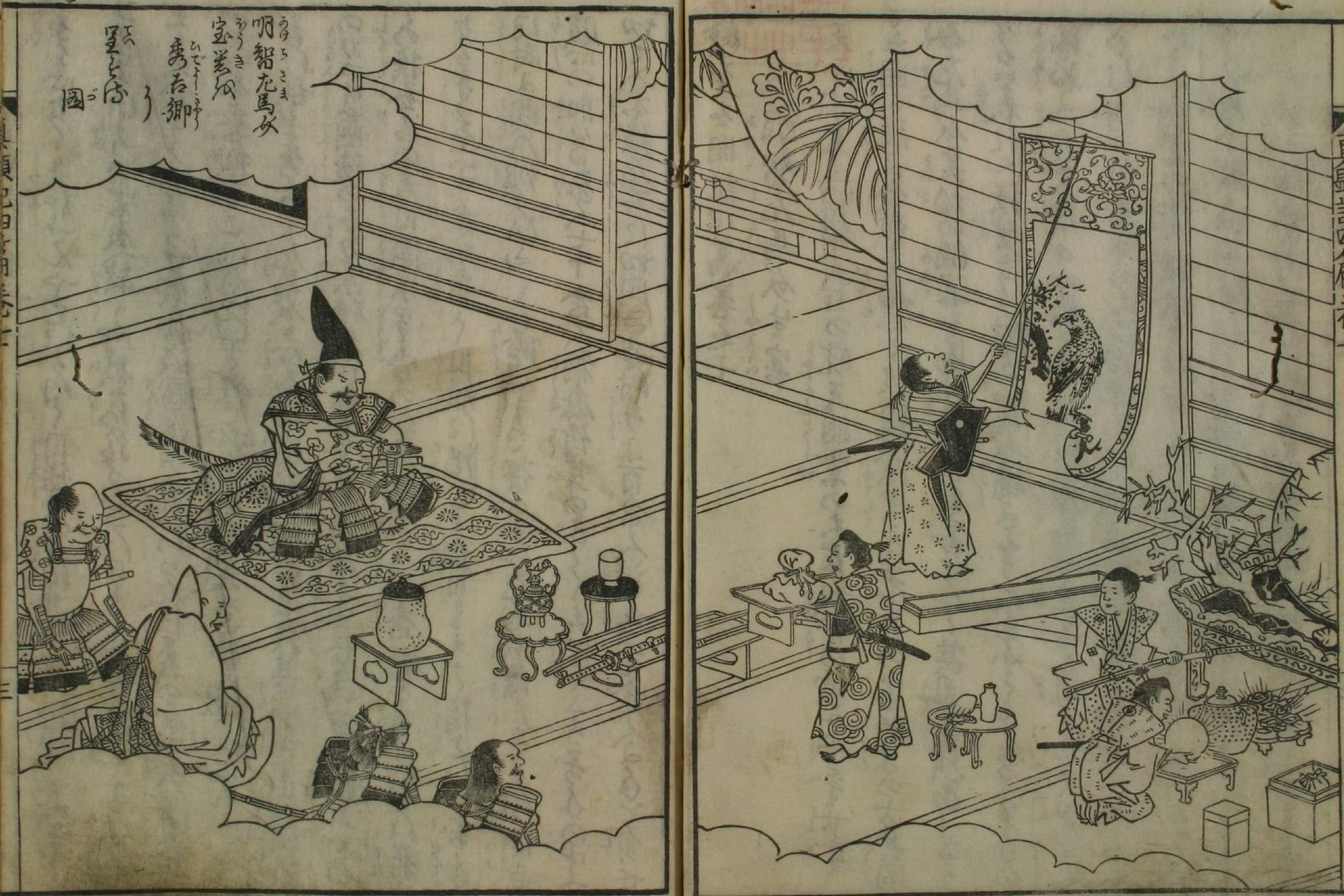
斎藤内蔵助被誅話
堀尾茂助吉晴斎藤内蔵助を生捕圖
石田三成斎藤内蔵助を賊と斥圖
小田家旧功臣等會二清洲一話
六斎念佛の由来
秀吉光福寺に于萊山の号を賜ふ圖
秀吉参内之圖
紹巴法橋智を以て縲紲を免るゝ圖

[stamp]

繪本太閤記七篇巻之七

明智左馬介生害

天正十年六月十五日の暁天羽柴の大軍坂本の城を十重廿重に取囲み既に合戦を始んとしけれバ城中より光秀の室照子の方出敵左馬介宴筵の酒宴を成し遊楽く自害せんと其用意なしけるがなるは義に比し次第なり附に左馬介櫓によりて大音に呼はく中なるは光秀の縁ある一言申度るのぼかく中は明智左馬介光春也近く出玉へ見ざんなれとよばれは先陣の大将堀休太郎秀政堀際に馬を乗出し何ぞのひぞや羽柴の旗下堀休太郎秀政と同大音小名乗より左馬介なれゆうに只今我も此所に於て生害を遂げ城に火をかけ終りやんべきもののくぢん此は信長公御不秘の珍宝名器当城に秘座さする主家の重寶

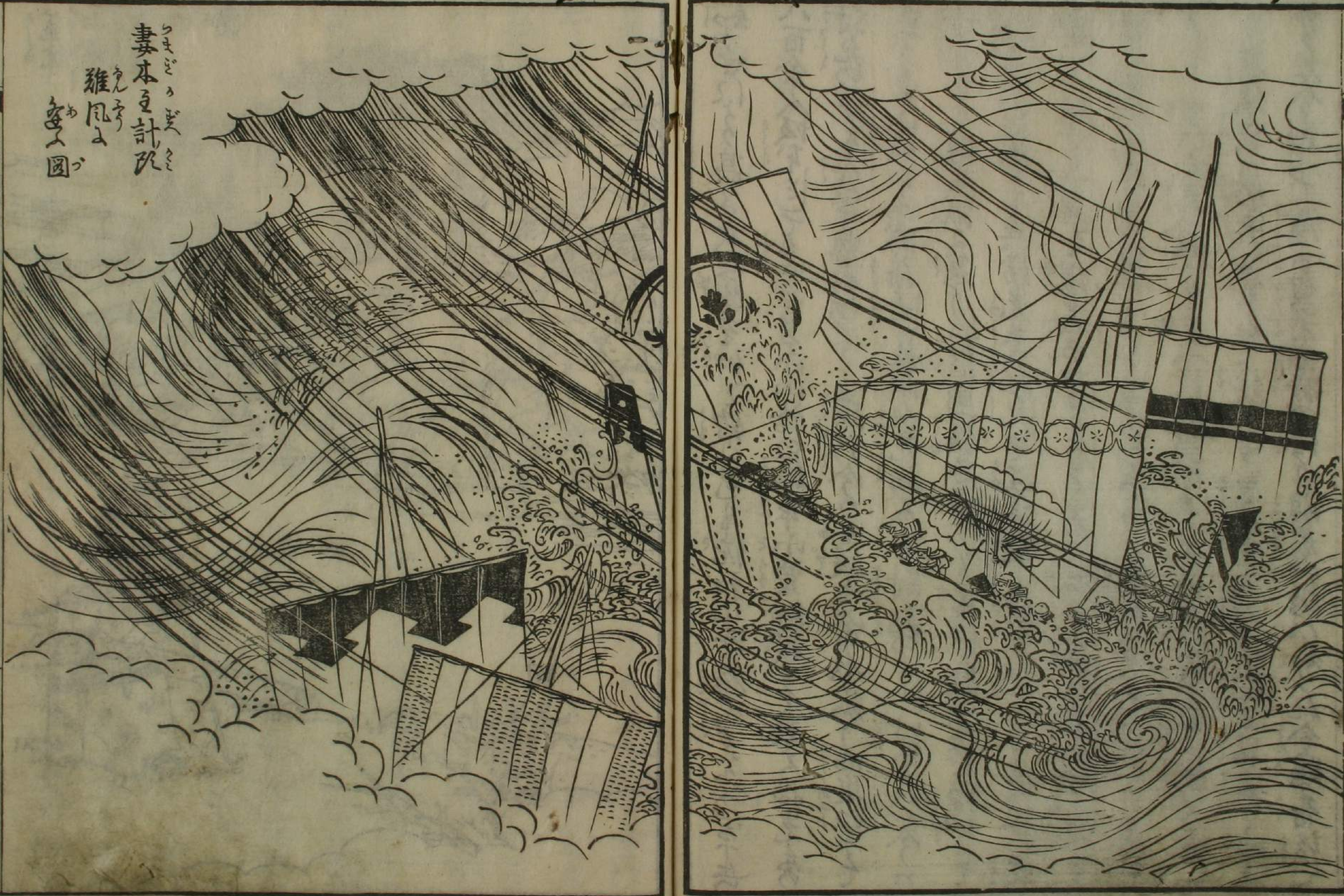

明智左馬介宝器を秀吉卿へ呈する図

争ふ心なく失節せんやとてよく目録を添其を御陣へ送り申べきとて
ありけるは右羽柴殿へ能々御披露給るべきにはとて錦にて包たる宝物
を矢倉より投出せば秀吉感涙を流しけるとなん仁義の武士哉羽柴殿
の御前委細言上に及びしかば軈て數多の宝器を請取軍使を帰され秀
吉は勅ども秀吉も左馬介が心底を感歎し聞召れ其品は不動国行
の刀二字国俊の太刀薬研藤四郎吉光の脇指稀なる良茎の茶入紺ふて乃
お指無名の天目徽宗皇帝の舊多の絵さるの香炉を首として世に希
なる寶器ども十余品悉く目録に記し夫より御目もろく指上れば寄手
ほ附ふ同ひと感じけり左馬介城戸をさらと開き
腹心の郎等家人七十余人稲麻竹葦のごとく取囲ける寄手の中へ
切て入前後左右に切開きすはや其二百余人討死し々手を負せ

坂本落城の図

味方も悉く討死し今は僅に十七八騎になりぬれば是までぞと城中へ引入
ぞろや本丸より火を出し一族の上下三十九人皆生害して死たりける光秀の
室年十八歳二男十治郎十二歳三男自然十一歳女子九歳末子乙寿丸
八歳長閑斎六十七歳左馬介年十六歳其外奥田左衛門一之門清三
郎妻木勘介松本八之丞皆自殺して火中に飛入其日の午の刻坂本の城
落去しけり光秀が妻の兄妻木主計頭範賢は一子余人長浜の城代
なりしが十日の暮方左馬介が告によりて阿閉万五郎友近と供に長
浜の城を打捨無勢湖水に船を浮め坂本へと志し遥の沖へ漕出しける
俄に悪風吹起て数艘の船ども悉く覆り哀むべし妻木主計頭阿
閉万五郎をはじめとし一千余人の軍卒一人も不残琵琶湖の藻屑
となりしとぞ然るに又佐和山の城代荒木山城守行重も左馬介が

知らせによりて其子友之丞重仲と供に是も佐和山を捨置上下の軍兵
八百余人坂本さして急ぎける小山崎の役軍小栗栖村まで無残なる光秀
討死の事を伝聞軍勢ぬけぬけに落行今は主従十余人になり西近江まで
来りけるが坂本の城落去し長閑斎左馬介も討死のよし聞えければ今は
詮方なく櫛木鍬に至り丹波国へ赴きけれども家にも羽柴の兵満々て
剰へ亀山の城も十兵衛光秀病死して落城し空へ居れば今ぞ天地の間
廣しといへども一身を隠すべき所もなく玉に踊て悲れ然び地に踏して
隠れ歩行に近江の坂本へ　さまよひきたり城跡の有りける所に蕭
くと其ひて前の跡も見えず只近き所までは大廈高墻巌に構へ有し
も忽須臾に灰燼し忠を仕へし君信を合はせし朋友皆悉く世に
なき人となりて城に無着悲滅の理り眼前に因ひ知られ今燐香絶て



妻木豆計既難風に逢図

荒木山城守剃髪の図

ハ荒一叢の畑と跡ハ玉殿焼消てハ蛍火の闇を照らさんも無る事に
やされバ孫須ハ咽び忽髻を切て釈門に入諸国修行に出けり家臣も
然るに内藤安利三八十三日の夜ハ落を切援宇治の方へ落行けるを
夜もふ越に近くしも無双の勇士なれども今朝より数度の戦ひに労
其上飢に臨くされバ胸しく木陰に立寄木の根に腰かけて休息せしに
後の方より駄荷馬を引馬士一人歌を諷ひて来るまてより然ゆゑ
を見て我身労に歩行て落行難く此馬を奪て落行んと馬の
傍へ立寄と見しが彼馬士を抜打に切倒し馬にひらりと飛乗て一条
の大津に出唐崎を経て堅田の浦に至り此所にて内藤の乳母の
弟老くい従ろ分るんと[illegible]くそこに宿より見返りし此家の房の戸をゆそ
を開き二六十余の老姫の又結白に[illegible]此時夜いつて更て継来

岳藤内蔵助馬を奪ふ
先回り走る図

と云人もなく幸のなき乳母の家の方へと馬よりおりて近く立寄て
月影に彼老姥を透し見んとするに乳母之れを見て嬉敷て詞を
かけ給ふは御身はよそながら内蔵介利三なるかと云ふ乳母打頷き
こは斎藤君の妻なる女部の妹なる希人の未亡人にて見ん人に
く今せ給へとてせまれ君を清め内蔵介を信じて入扨しもいかに従人
も百連なれば疲れ入いかゞ源なる小行守きし姥が菴を見給ひてそ
世に心若しかひでや今日山崎の合戦に君も打出給ふかは御味方敗
北して家は後はおかん合戦のさまいかゞなるぞやと老の心のせはしく
も見給ふ小内蔵介は山崎の始終をあらく物語り日向守殿の素性を
安て後来者と三尺刀根にかん為勝らぬ命ながら今は亡し家と落来れりと云
姥是を安て玄御身もいかに究竟思ひて家に隠れ給へ我子代々継き

去武そ給へども力も強くは須に御方へおもかりて筑前守を討せ申さ
んまに付は代々の譜代より宇治の里まで馬に荷を探せ参りけるが
今は何や此の何卒とはじめ遠くはかゆんとて案じけるに横之内蔵介
姥に向ひくゆるは今の事が索来りし馬を引れ繋ぎ乗ける見えるを
やはしやと姥も甚馬をよくしく見けるが我は君にも馬すてはへ立よ
右まではとは我子なれや君の見参に入ひと覚へ従る何方へか参りけるやと
問ふ内蔵介涙をそゝくと流し我武運もつきや盡果るとそ見える
物ならし日向守殿の股肱と頼まれ今日合戦の先手に撰まれ百戦勇
を震ふといへども味方無勢にて及びぬまで力なく終に敗走し敵と組ん
で討死すべき命ながら生て参り一尺刀根をと鞍を本る主人と生死を
倶にせんと山崎を切ぬけ宇治の方と参りしに馬を引て来る者に

毎尾内蔵介
蛭田の浦より
乳母の家
を弔ふ図

乗其疲れに労れ彼馬士を一太刀に斬殺し馬を奪て落ち去りし誰
か知らん其馬士は汝が子にてありしとはたまたま我に力を合すべき若者と我
子を汝之を殺しむ本の中に雨ありて幼き微運の我子の果る運に逢さ
る羽柴筑前守が事ろ近寄討取ともべきに傍にて死とべき子の身のまま中なる
忠義を思ひ老の身の歎きをかけ我子のもしよしうなき罪を継ぎ不論本意を
遂べきにあらず孫は切腹して死とべきなるまで頭をきを晴せよと服情をまちを
悲しけれ姥周章まどひ付走れ物に狂ひ給ふか誤く家人一人を召とて其室
君の切腹給ふようやめべき此子にて大記給ん御命をながらへ給ひ羽柴
一度を付給ふひ運尽く討死給でいらふせん浅ましき御身の上をそひやと
さめざめと歎きける内蔵が涙を止めさせ体理を弁へ知らざるにはあら
孫もさらで残りなき老の身の二人の子を失ひ嘆や苦しと思ふに

らんと其歎きを思ひ斗生害せんと臥しつる汝が誅に従ひ我一旦此命
を備たる本意を遂しうくもまた叶はず討死をなすも其時の死て
そ汝への云訳ぞや姥る涙をとどめ兼世の中に武士の身の程ほどなき
物はなし今の生害は止め参らせどもいたどい忠義のために命を落し
給ん甲斐なき此子は世にまさかく有君に仕ひ子に先立なき命の
絶ざるはうき此の世なりと涙にむせびしけるかる

斎藤内蔵介被誅

斎藤内蔵介利三乳母の姥が子を抱きて堅田の浦に身を忍び諸方
の音信を聞ける所日向守光秀は十三日の夜小栗栖にて土民
のために命を落し亀山の十兵衛光慶病死して溝尾庄五郎
兵衛惟恒も切腹し坂本の城も落去して長閑に左馬介光春

堀尾茂助吉晴斎藤内蔵助を生捕る図

の室云進よむると悉く自害のよ追ひ人口よ噂しけれバ内蔵介今
ハ討死と思ひ定めけれバ秀吉よ向ひ君の恩を報ぜんと六月
十七日京都ニ出てよりふるふ大津の町ニて堀尾茂助吉晴が手勢二
百騎計引連光秀が残党を捜しけるふ猶かくも引あひてり
内蔵介堀尾之と見るより笠を傾けて行過る気心利たる堀尾怪
き者と見てかく兄弟の士卒に下知し捕へしむ内蔵介今ハ是までと思ひ
太刀抜き近寄る兵ハ六七八人悉くうけて切廻し日向守が股肱の臣なる
斎藤内蔵介が最期の名を連堀尾茂助おもてに立て不足なれバ首を
捕よせよと一文字に切てかゝる堀尾元来大勇無双の兵なれバ云ふや
及ぶと太刀打合せもせで兵二人切先よりかゝる㒵出し討手割り
戦ひける堀尾が兵卒二百余人四方を囲こみ助んと向ひて並べ

蚤て乃敵範が運既よ尽てりとん打込太刀のかハりきと引て引除に
及ずと斗持て太刀の光ゆる堀尾茂助是を見てく太刀投捨いざ
組んと引よせ双方の獲物を捨て強兵なれバ獅子の如く咆哮虎の如く猛り
踏鳴し大地も裂んきれバ六月十七日炎暑の汗を流し揉合が堀尾が力
や勝りけん終よ敵範を組敷て数多の士卒是を見て喝采と喚ひて
押寄て縄をかけて引立る無残とし搦捕て此附羽柴筑前守秀吉公
寺々に本陣を居へ諸方の落武者を捕へ給ふ堀尾茂助敵範を
生捕三井寺よ引来り彼と云ふに及ひけれバ秀吉大よ喜び敵範
ま無双の勇士堀尾よるむどんバ生捕の難かるべしとて再三褒詞ありて
黄金太刀を下し賜ひ敵範を召出して此時よ右田徳若三成敵
範よ向ひけるハ汝光秀が股肱と頼まし勇臣が一合戦の合戦よ討

石田三成每夜内府を殺んと欲す圖

死もせず捕れとぬかするは勇者の恥る処へ誠に命は惜き物なるぞと
云内蔵助三成をきつと白眼我ら程の戦場を切抜する者命が
惜くて逃すると思ひしは汝が心のきたなき故大丈夫の死をとげるより何へ
遁るべき道何恐しとて逃隠るべき我ら侍の合戦味方敗北せしは十三日の暮
方主君日向守勝龍寺の城へ入しと聞ども先手に在し殿軍の中を
見ば討死や者やを突も寄手角戦ひ挑む内に味方の陣ゝ乱の
おとく解けに角八方へ散乱し家に拘ひて乗る主人と安危を知せんと
囲を切抜宇治の方より坂田の浦まで廻り明日十四日味方の役を受より
日向守殿討死せられ其上十五日坂本の城も落ると聞よりて山崎に
て死すべき今の恩とはいかほど始めて是を後悔せしぞと云ども匹夫
婦のおとく何ぞ窮死せんや我ら秀吉に近付ようと遠へて死せん

ものと身を悩ひ何ひしに運盡て生捕れ勇士の如く不似て我是
を恥るのみ唯潔く死に着んのみ汝等小身のよく知所に非ずと云
石田三成是を聞て完介と笑ひ誠に勇士なれども智は甚暗し汝を
忠び家人にて親を離れ晋の孫讓が之我君織田信守を汝が主光
秀とれ智伯范仲氏と是之光秀は右大臣御父子を弑逆する謀殺人
織田守が為に徳に天に戴ざる君の親之何ぞ是を助け悪事を為べき
叛逆を殺すに親討する法やいつる事なりとてぞ汝光秀が為
死を受ば甚不仁て生害せんに誰是を誹謗せん我生に内蔵助は智
勇の士と聞しに今の約ひを見るに愚なる事甚し惜むべきに非
ずやと内蔵助是を聞て眼を張大音に呵りしが良ありて眼を上げ石
田三成が智を笑て秀吉の寵を得すりと宜哉今の一言も尤あやま

里之様といへども狼藉非義をなせよ運盡はてて討れし時ハ筑前の御首を以て日向が墓に手向んと兄もつて一図よりしや豫譲が志にはおとるとも猶しく勇夫の心を知べからざるなりと云賞て後に小栗栖村の百姓中村長兵衛が擒とし光秀が首并溝尾庄兵衛が首と倶に内蔵助を日の岡山に引出し首を刎て梟し獄門に掛られける内蔵助生年四十五歳其最期に臨み辞世あり其詩に曰

生死有無白刃空　殺身曝尸報君公
可憐晋國刺衣客　共感生涯一度中

和歌あり曰

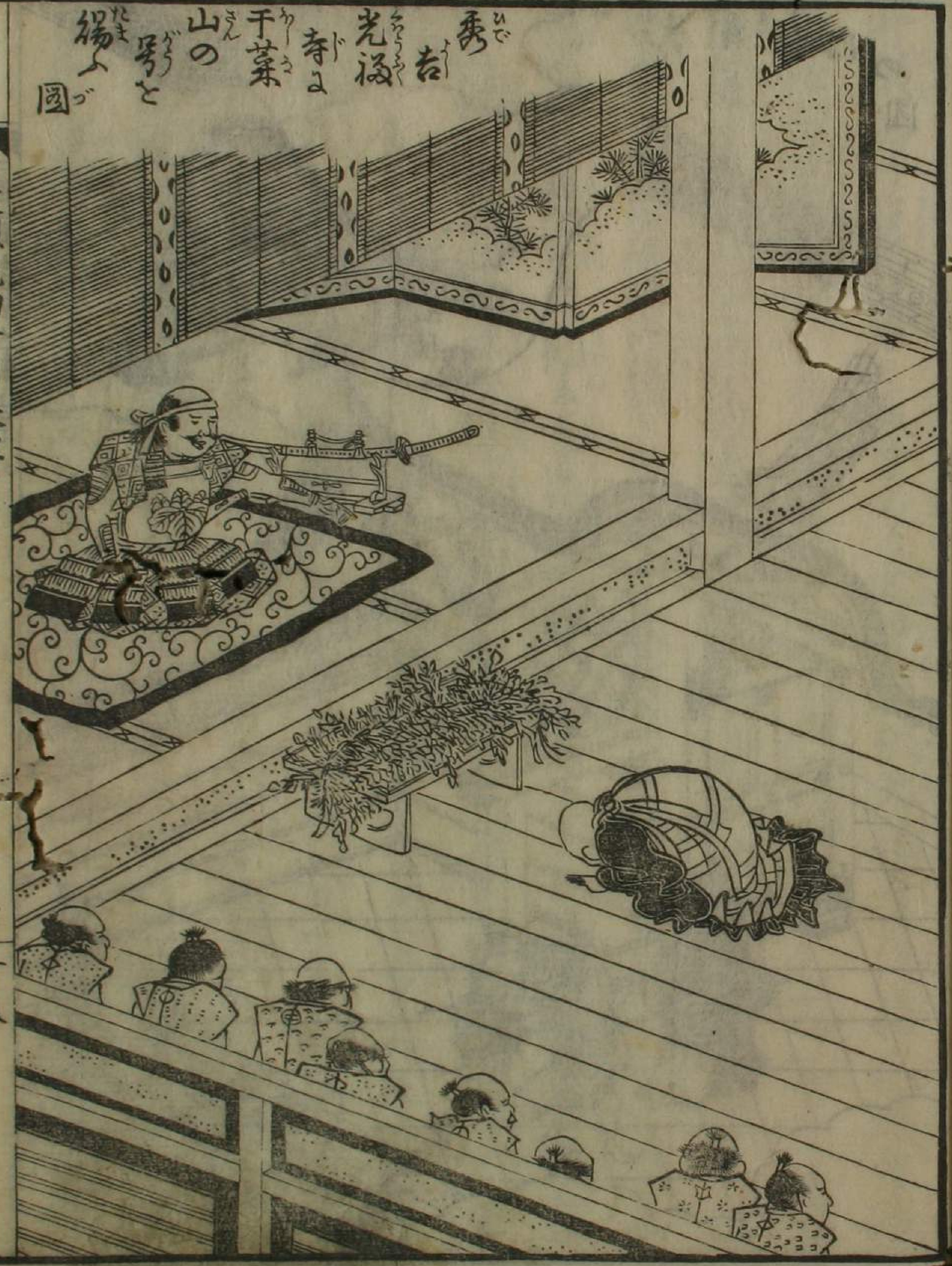
きえて行露の命はこころ夜のいのちとも結べる日の岡乃峯

小田家公達功臣等會清洲

羽柴筑前守秀吉ハ山崎の一戦に逆臣光秀を討て亡君の怨を報じ給ふにより僭妄怨秀吉は帰て義兵の大小名皆悉く降参し陣門に市をなせり六月十七日三井寺を立て京都に入給ふ先陣は堀休太郎秀政にて百人二陣は中川瀬兵衛高山右近二千余人次は秀吉の旗本壹万余騎後陣は池田勝入斎三千五百余人遥に引下りて是も丹羽五郎左衛門長秀并其外の大小名思ひ〳〵に手勢引率し御供ぞ参りしが今宵は大徳寺を本陣と定められ先陣もや紫野に入んとせし時に夜の始まり及べり然れば京の所々に大鼓鐘の音喧しく其相図にいく勝しければ先手の軍卒勢引て是を伺ふに驚き衣を着る個に只人毎に征夷鼓を叩き忌備を備之軍卒甚だ騒ぎ引揚本陣に達来す秀吉是を近く呼寄し御る僧の如して征夷鼓を

六斎念佛の
宙来

人々を嘲弄せる雑言悪口ハ五郎之其ハ由縁を市と嘆りたまふ
彼僧者大に恐れ中にも氣長する僧御前に跪をさげやゝありて拙僧は
今出川东の河原に光福寺とかん名僧ゆゑに近年打續兵乱の三
けて寺も大破に及び諸旦那へ勧化仕るとも穏ならぬ世のさまゆへ
未だ識の寄進もなき次第に寺圍彩に及びいかんとも詮方なくけごろ
拙僧念佛に太鼓鉦を調せ拍子に押し唱へて洛中洛外を勧化仕る
不彼軍するは實に太鼓鉦を打拍子の珍らしき思ひの外に
寄進多く今は同様出精いたし太鼓鉦りてもやし歩行り是れ許ら
はも御陣の傍を勧化いたし御陣に近づき参上し候と委細詳に言
とこされば秀吉公是を聞き念佛ある面白き念佛ると弥縫を
こそかさく勧めとして陣太鼓を賜ひされば彼僧ハ難く辞し


秀吉光福寺に千菜山の号を賜ふ図

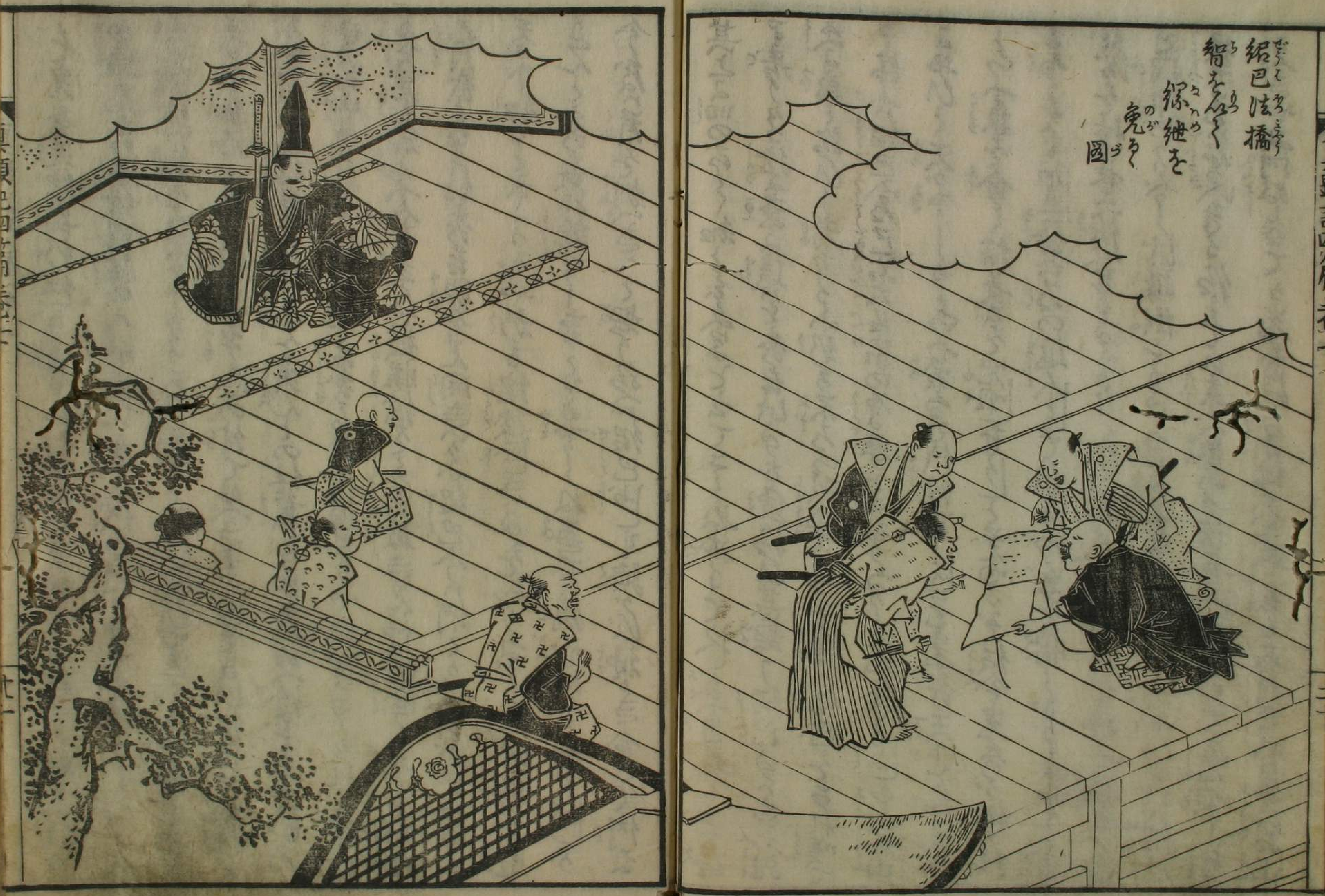
御暇給り悦び勇みて帰りける其翌朝総光福寺の住持大徳寺乃
本陣へ来臨ありて念仏御免の御礼として糸卓貝御同朋への贈ありとて
千菜一連を献上す秀吉大に悦喜ありて千菜山と号を賜ふ是則
今の六条念仏の由緒といひつべし六月十八日羽柴筑前守秀吉参
内ありて菊亭大納言晴季卿に申て奏しけるは微臣秀吉
天の助けを蒙り逆臣惟任光秀を山崎に於て誅戮せしめ残党
悉く是を退治し今は皇都の内に乱を発さん者なく然るに
皇居近く兵革を動し叡慮を悩し奉る条恐入て天慮を伺ひ奉
るのよし謹で奏せられけるに叡感御座て天下の肩を負し勅旨給く擁い
今度惟任退治の後速に功を成し洛中を平均せしむる条ゐる名に依
て向後京都の守護為すべく勤仕令むべしと綸旨下さる秀吉謹

で命と令し退出せられたるに依て京都守護代として堀尾茂助
吉晴を止め置盗賊を搦め政事を正し専ら仁政を施しければ秀吉の威
勢朝輝のごとく赫きぬされバ光秀が残党余類ハ悉く山林に隠れ
江湖に身を潜め跡をも止ず此時に当る天正十年五月廿八日光秀愛宕山に
登り西の坊威徳院にて連歌興行しけるに紹巴も列り光秀

時は今天が下しる五月哉

是ハ光秀信長公を討て天下の政事を知るべきのゆゑを祝して作り出せる
句なりされバ此時京中の男女専ら此句を評して或ハ紹巴が作なりと囁く者も多かり
けれバ紹巴大に是を恐れ光秀の亡びしに依て滅亡しぬと決し予て愛宕山
に馳登り彼威徳院に入て茶の懐紙を出さし披見しけるに不図思出し
し傍へ退て發句の天が下知るの知といふ文字を小刀をもて密に削り又

其上に旧のごとく知といふ文字を書て置ぬ彼が是まで自若として帰
り居たる所に素より遠慮を秀吉公此事を聞給ひ甚怒り紹巴を召して給
ひ之に事を尋給ひし者をもたる不忠の所業やあると更に紹巴を召し責て
中納言にハ紹巴ハ元已に右大臣家の厚恩を蒙りたる光秀に与し愛宕山
にて但ひて天が下しるといふ發句を代作せしは是光秀の天下を知るべき
といふ意味を含み信長公を呪咀有りしと見ゆるぞ仮令光秀が作りた
るにもせよ始め其句の連歌として作る句を悟らざるやうのことき
拙きを信長公へ御する事なく終に御生害に及バせ給ひハ汝光秀
と同罪のものなれバ速に誅罰をなすべきなれども急度申す所あれバと宣ひければ紹巴
畏て是ハ謹て申上す其ゆゑハ素より悪なる信長公何思のて呪咀し奉
るべきや又何故をもて光秀に与力仕るべきや去る五月廿八日愛宕山



紹巴法橋智をもつて縁継を免るゝ図

さて光秀連歌興行仕べき旨申により縁何の差障もなく登山仕ば
勿論光秀連歌堪能の人に候へば秀吉に代る我させ申べき筈もなくば
且其席の発句は天が下なる五月哉とこそ聞ていひつれ今厳命なれども
天が下知るといふには来年の心の付でいふべき詞にはさまで紹巴と編輯を
る者みな讒言を構へ来年を失んとの仕業とこそおもへ詮ども秀吉はかの
愛宕山にて懐紙を取寄られ御披見ありやいふべき事申されば秀吉
急ぎ愛宕山へ人を走らせ彼懐紙を取寄披き見給ふに正しく天が下知る
五月哉とありければ秀吉眼を見開き汝紹巴今は何とか諫べき言見よ
天が下知ると云るぞや知る纏援正しき事を知りながら汗附の罪を遁
れんと秀吉を誑せし事こそ要しね孟ては流罪にもと思ひしが
今爰は首を刎べきなれど縁り給へば紹巴出しも鑑がれ袖かき合せて何る

申せば紹巴かくまで今は勝まれ難しやん先に天が下なると云ては句を文
字は削りて知れざる文字を書入ては是御覧じ候へとぞ差出しければ
御前にありける人々各眉をしかめて何様是は疑ひもなく削てかきたる
痕あり誠に紹巴が申す如く讒者の所為なるべしとて秀吉の御機嫌
に候へければ秀吉ほくそゑみて更に詞を出し能くも申したり紹巴
己は才智賢き人なる故に此度は是迄の犯罪を免じ永く都の
地を追放せしむるぞとて孫五郎と命じ給ひ紹巴は危き虎口を
遁れ辞して退きける誠に紹巴が才覚人に勝れ知といふ字を
削りといふ字は書くして向の如く書たる故縲紲の恥を遁れ其後は
江州に退きて三井寺に籠居したりける

繪本太閤記七篇巻之七終